

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	文学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.2 教育課程・教育内容
小項目	6.2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。
要素	必要な授業科目の開設状況 順次性のある授業科目の体系的配置 専門教育・教養教育の位置づけ(学部) コースワークとリサーチワークのバランス(院)
小項目	6.2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。
要素	学生課程教育に相応しい教育内容の提供(学部) 初年次教育・高大連携に配慮した教育内容(学部) 専門分野の高度化に対応した教育内容の提供(院) 理論と実務との架橋を図る教育内容の提供(専院)

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 前期課程については、専門性を特化させた研究を行い、質の高い修士論文の作成を指導する。	→修士論文の完成度、提出状況、学生の進路、修士論文の査読評価。	A	B	B	B	A
2. 後期課程については、優れた研究成果を携えた博士学位の取得者を安定的かつ継続的に輩出できるように指導する。	→領域ごとの博士学位論文授与数、博士論文計画書、予備論文、博士論文提出までの経過年月、審査結果、授与者の進路調査結果。	B	B	B	B	A
3. 学位論文作成能力を養成するために研究の進捗状況に応じて段階的な指導体制を整備する。	→「研究演習」における学位論文計画および「博士論文作成演習」における予備論文の学術的達成度の評価。	B	B	B	B	B
4. 専門分野の高度化および隣接分野との学際化に対応したカリキュラムを継続的に運営する。	→大学院生の多様なニーズに対応しているかどうかについての毎年の調査結果。	B	B	B	C	B
5. 教育成果としての大学院生による学会発表、学会誌への論文投稿、研修への参加などを活発化する。	→日本学術振興会特別研究員への申請数、学内奨励金制度への申請数、その他の研究奨励金などへの申請数と採択状況。	B	B	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
		/	/	/	/	/
		/	/	/	/	/

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 6-1で述べたとおり、研究成果報告書の提出を義務づけて、見直しを持った論文作成を促すための制度的整備を進めた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2014年度からの導入であり、その評価については年度末を待たねばならない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 提出状況を踏まえてさらなる改善策を明らかにする。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 6-1で述べたとおり、研究成果報告書の提出を義務づけて、見直しを持った論文作成を促すための制度的整備を進めた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2014年度からの導入であり、その評価については年度末を待たねばならない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 提出状況を踏まえてさらなる改善策を明らかにする。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 後期課程では、その目標を達成するために、「博士論文計画書」の提出とその承認を経てそれまでの「研究演習」から「博士論文作成演習」の履修へと進み、その段階で副指導教員を選定してさらに「博士予備論文」の提出とその審査合格によって「博士論文」の完成につなげる、という段階的な指導体制を組んでいる。加えて論文指導体制を強化すべく「特別研究」科目を設けている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 上記の手続きに則した指導が円滑に進められた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 段階的指導体制と新規に導入した年次研究成果報告書との組み合わせにもとづいて指導する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 学際的な研究をすすめるべく、複数の研究演習を履修(複数ゼミ履修)することを可能にしている。「文学研究科特殊講義」は、領域横断的な研究をすすめるにあたって一定の役割を果たしてきたが、2013年度は開講していない。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 「文学研究科特殊講義」の新たな展開について大学院執行部会、大学院問題検討委員会などで議論を行ってきたが、成案を得るには至っていない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 上記の検討を進めていく必要がある。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標5	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 日本学術振興会特別研究員、学内の後期課程研究奨励金、大学院奨励研究員、大学院海外研究助成金への応募と獲得に加えて、研究科独自の研究支援制度による学会発表などを奨励している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か	
		2013年申請・2014年度採用の日本学術振興会特別研究員への新規申請者数は26であったが、新規採択された者はいなかった。2013年度の全学共通の大学院博士課程後期課程研究奨励金の採択者数は5名、大学院奨励研究員は2名、大学院海外研究助成金の採択者数は7名である。文学研究科独自の研究支援制度を利用して学会発表を行った者は2013年度は前期・後期課程合わせて21名であった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か	
		研究科独自の研究(学会発表)支援制度については1件あたりの増額の要望もあり、適正なあり方について検討する。日本学術振興会特別研究員に採択されない者に対する学内的な研究支援のあり方についても、質の担保などを念頭においた適切な運用のあり方を検討する。	☆
		その他	☆
			☆
備考			☆